

## 『社会科—現代 問われている世界—』

本書は、筑波大学名誉教授である大濱徹也氏が主宰する社会科教育研究会の2003年度合宿研究大会の成果を上梓した論文集である。第1回から第15回研究大会までの成果をまとめたものとしては、『歴史教育の新地平』（同成社）が1997年に出版されており、これをふまえ、本書は、「会員各位がより直截に己が内なる世界から明日を生きうる社会科教育への思いを吐露したもの」（p.252）である。

9名の著者は、中学校や高等学校の教員をはじめ、大学教員、企業に身をおく者とバラエティーに富んでいる。そのため、本書で扱われている主題も多岐に渡り、従来の社会科教育論の範囲を超えた広がりをもつ。

しかし、そうした多様性の反面、研究会の成果であるがゆえに、本書に収録されている論文は、いずれも社会科教育研究会のエートスを反映したものとなっている。

編者の大濱氏は、社会科教育研究会について、「あとがき」で次のように述べている。社会科教育研究会が20年余に渡り存続しえたのは、同会が、「一人の人間として、己の言葉で学び育つとは何かを問いかけ、己が心の軌跡を確かめる場であり続けたから」（p.249）である、と。

研究会の成果としての本書には、そうした会の性格が反映されており、社会科教育が抱える問題を、政治や社会の問題に還元してしまうのではなく、自らの問題として引き受けようとする著者の姿勢が、本書の魅力となっている。

本書の基本的な主張は、大濱氏が「はじめに」に寄せた「現在社会科教育が問われること—国家を相対化する目とは—」という論考のなかによく現れている。大濱氏の議論は、「民主主義の根」ともいべき検証文化の拠所として社会科を位置づけようとするもので、検証文化との

関わりから社会科の意義を捉えようとする独自の視点が示唆に富む。

大濱氏の論考が社会科再生への指針を与えるものだとすれば、第一部「現在 教師として考えること」と第二部「一教師である私の場」に収められた9つの論文は、氏の提言を受けて、それを各著者が、自身の生活する場から考究した成果である。

第一部に収められた4つの論文に共有されているのは、昨今の社会科教育の在り方に対する危機感である。

「社会科の復興—社会認識力の回復のために—」では、野口剛氏が、アカデミズムの論理が先行し、根本的なところで生徒の生活実感から乖離してしまった社会科教育、歴史教育の状況に鑑み、人間の生活世界から出発し、社会現象を総合的に把握し、問題を多角的に分析する手法を手に入れようとした初期社会科への原点回帰を説く。

「モノを忘れた社会科教育—「総合的な学習の時間」と博学連携—」では、伊藤純郎氏が、「学問の精神」に拘泥するあまり、本物のモノを見せることも並べることもしない「モノを忘れた社会科教育」からいかに脱却するかという課題を、「総合的な学習の時間」における「博学連携」をテーマに考察している。

永野みどり氏の「写真資料をどう読み解くか—中学「地理」教科書を素材に—」では、地理教科書の写真が、そこに示される生活・文化を、あたかも不変であるかのように、生徒に印象づけてしまう問題が提起され、この問題を克服するために、著者自らが行った授業実践が紹介される。

「高校生の自己認識と歴史学習」では、熊谷明彦氏が、歴史学習の目的が「存在被拘束性」（K・マンハイム）の認識とその超克にあるこ

とを論じ、「自分史」を歴史教育に位置づけようとしている。

以上のように、第一部に収められた論文が、著者自らの経験を足場としつつも、社会科教育、学校教育全体に関わる問題を議論しているのに対して、第二部に収められた5つの論文は、著者がこれまでの教育実践と己の内面を省察し、これを世に問う内容となっている。

畠山久美子氏の「社会科一教師に何ができるか—私らしく語る社会科—」、渡部徹氏の「私の授業は何点ですか—『相互評価』に関する実践記録—」、田澤直人氏の「社会科教師としてしてきたこと—いままでの実践から—」、そして中村光一氏の「科目〔日本史〕を担当して—地方小規模私立大学教員の十三年—」からは、教員の苦悩と喜びが生き生きと伝わってくる。教育に携わる者として、著者が何を思い、どう生きてきたかをつぶさに知ることができるこれらの論考は、20年前後に渡る教員のライフストーリーとしても読み応えがある。

第二部において、異彩を放つのは、一倉保氏の「学生が社会人になるということ—採用教育担当の視点—」である。一倉氏は、企業の採用

活動や新入社員教育の内幕を紹介しつつ、企業の視点から、学生が社会人になることの意味を考察する。そのことが、社会科とどのように関わるのかが知りたいところではあるが、こうした企業人の視点は、従来の社会科教育に関する書物には見られない斬新な視点であり、一読の価値があろう。

上述のように、己の経験を拠所とし、己の言葉で語ることに重きをおいた本書は、それゆえに、とくに第二部に関して、やや客観性に欠けるきらいはあるものの、著者自らの教育実践を足場に論じることで、現場を知る者だけが語りうる経験の重みを伝えて余りある。これから教員を目指す学生にとっては、教員生活の実態を垣間見る絶好の機会となるであろうし、すでに教職に就かれています方にとっては、自らの教育実践を見つめ直す契機を与えてくれよう。社会科の意義を再考するうえでも、格好の糸口を与えてくれる書である。

(同成社、2006年10月刊、255頁、3,990円)

筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科  
藤井大亮